2017 年度 E.FORUM「全国スクールリーダー育成研修」実施の様子

京都大学大学院教育学研究科教育実践コラボレーション・センター E.FORUM では、2017 年 8 月 18 日（金）・19 日（土）に、京都大学吉田キャンパス国際高等教育院棟講義室 31 他において「全国スクールリーダー育成研修」を開催しました。当日は、北は北海道から南は鹿児島県まで計 146 名（1 日目 131 名、2 日目 104 名）の教職員や教育委員会関係者の方々が参加し、盛会のうちに終えることができました。

【本研修に対する評価】（回答者 128 名）

とても価値がある	価値がある	どちらともいえない	あまり価値がない	まったく価値がない	無回答
103	20	2	0	0	3

＜1 日目＞ 8 月 19 日（金）

●オープニング＆自己紹介

研修運営担当の西岡加名恵教授から本研修の概要説明をしました。参加者同士の自己紹介タイムを設け、全国各地から来られた方々の熱気が溢れる中でスタートしました。その後、午後の前半にかけては、3 つの分科会（分科会 A・B1・B2）に分かれ、講義・ワークショップを行いました。

●分科会 A ：「カリキュラム設計入門――パフォーマンス課題づくり」 担当：西岡 加名恵 教授

学習指導要領改訂のキーワードを解説するとともに、パフォーマンス課題の作り方について説明しました。その後、実際に参加者にパフォーマンス課題づくりを体験していただきました。最後にルーブリック（評価指標）の作成方法についても説明しました。

＜参加者の声＞

・パフォーマンス課題のつくり方、大変勉強になりました。これまで取り組んできた自分なりに工夫した課題だったのですが、「本質的な問い」、「永続的理解」が見出せませんでした。まさに逆向き設計になっていない自分の設計の甘さを実感しました。教科の本質を見直す必要があると強く感じました。

・パフォーマンス課題作りに初めて取り組みました。なかなか難しくて時間内に作りきることができませんでしたが、家へ帰ってもう一度挑戦してみようと思います。これまで授業がしっくりこないな、という思いがありましたが「本質

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2017

的な問い」とその理解、評価方法などを事前にきちんと準備できていなかったからだと気づきました。2 学期以降は改善したいです。

・3 年目研修で 11 月に授業をやります。今回の研修の中の「逆向き設計」論の話では、子どもたちをどんな姿にさせたいのかというテーマで、実際に単元について考えることができ、有意義な時間を過ごすことができました。実際にやってみると、どうしても本時のことを最初に考えてしまいがちなことを改めて実感しました。これから「逆向き設計」を意識して、単元構成を考えていきたいと感じました。一日だけの参加でしたが、また行きたいと思う研修でした。ありがとうございました。

●分科会 B1 ：「若い教師に伝えたい授業づくりの発想」　　担当：石井 英真 准教授

授業づくりの骨格となる思考のフレームを紹介するとともに、教材研究をどう進めるか、学習者のつまずきをどう読み解くかといった、授業づくりにおける基本的な考え方について、ワークショップ的な演習を通して学びました。また、「教科する（do a subject）」授業をキーワードに、授業づくりの今後の方向性についても解説しました。

＜参加者の声＞

・「教材研究した結果ではなく、プロセスを子供と共にたどるように授業を組み立てる」という指摘に一番ハッとしました。教科で伝えるべきこと、教えるべきことを悩むより、自分が学ぶ中で体験した楽しさを授業づくりにいかすという発想で自校で実践したいと思います。

・“「授業は 1 時間のドラマ」として考え、導入・展開・まとめを計画する”という表現を自分の理想の 50 分間を考える上での指針とします。具体的には“子どもの追求心に静かに火をつけ、自ら課題を発見し、「わかる」までの過程を共有し学び合い、その深い学びに応じた広がりのあるまとめをさせる”ことを実践したいと考えています。形だけの“アクティブ・ラーニング”にならず、伝統的な学びのスタイル（30-40 人の創造的一斉授業で練り上げる）を活かしながら強化し、真の学び合いを目指して、良い授業をつくりたい気持ちが高まるお話をいただき、ありがとうございました。

・石井先生の話を聞かせていただくのは今回で 3 回目でした。3 月の実践交流会の際に「教育の“不易”につながっていくような実践を積み重ねていくことが大切だ」ということを聞き、“不易”とは何だろうかとこの 4 月からモヤモヤしながら学校生活を送っていました。多様化する社会・生徒・家庭の中で、教育というものを改めて考え直すときに、“不易”につながる実践を築いてこられた方々に学ぶことが必要なのだと思いました。とても勉強になる講演をありがとうございました。

●分科会 B2 ：「カリキュラム・マネジメントとの向き合い方」　担当：服部 憲児 准教授

政策動向や関連事項について確認した上で、SWOT 分析を用いながら、カリキュラム・マネジメントの方向性を検討しました。

＜参加者の声＞

・学校の目標の下に、学校全体をみるという機会がなかったのですが今回は、とても勉強になりました。忙しい日々の中で時間を見つけ学校がどこへ向かえばよいのか生徒をどう育てていくのかを職員室、個々の教育レベ

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2017

ルで話し合っていくことが大切だと改めて感じました。とてもよい機会をありがとうございました。
・現状の強みを「機会の活用」、「脅威への対応」に活かすだけでなく、「弱みをふまえて補強して機会をつかむ」、「弱みから出る最悪の事態を避ける」視点まで幅広く見つめ直す時間が貴重でした。つい忙殺され、「弱みの解消」にしか目が行きにくい日常の中で、うまく活用すれば財産となり得る自校の特性に気づけました。
・考え方の道すじを教えていただいたように思います。校内でやってみたいワークだと思いました。カリキュラムマネジメントからははずれますが、服部先生がはじめに示されていた研究（仕組み、島のこと、みえる化）も話を聞きたいと思いました。

●研究科長挨拶

稲垣恭子研究科長よりご挨拶がありました。

●シンポジウム ：「グローバル化時代の市民形成」　　司会：山名　淳 准教授

山名淳准教授の進行のもと、「グローバル化時代の市民形成」という観点から、3名の先生方にご報告いただきました。山ノ内裕子教授（関西大学文学部）からは「グローバル化と多文化共生」、南部広孝教授（教育学研究科）からは「国際交流・留学と市民育成」、そして矢野智司教授（教育学研究科）からは「世界市民・地球市民・宇宙市民」と題して、それぞれの専門分野の立場からお話いただきました。フロアからも沢山の質問や意見が寄せられ、グローバル化時代における市民育成の在り方について議論を深めました。

①「グローバル化と多文化共生」　　担当：関西大学文学部　山ノ内裕子 教授

＜参加者の声＞

・私は高校で世界史の教員をしているため「世界市民」や「グローバル市民」というキーワードが興味深かったです。現在、新学習指導要領や新設科目「歴史総合」や「世界史探究」についての議論が進んでいますが、この時の「世界史」、「歴史」とは誰にとってのものであるのかについて検討はされていない。山ノ内先生の語られた日本の「国益」のための日本人としてのアイデンティティを前提とした「世界史」が暗黙のうちに想定されている気がします。「歴史」もグローバル化に対応させることが可能なのか、考えていきたいと思います。
・グローバル化時代を生きていくためにどのような能力を子どもにつけていくかという観点でしか考えたことがなかったので、グローバル化について国家という観点から考えたり、外国にルーツを持つ人の学習権という観点から考えたりできて有意義でした。
・グローバル化、外国籍の子供たちの増加は現場の教員に実感として分かっている。国民性（アイデンティティー）の強調がなぜおこっているのか、今日の講義で理解できた。・・・しかし、教室の中で両方を満たすようなあり

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2017

方とは？と困った状況である。指導要領・高校地理の目標は「我が国・・・日本国民として必要な自覚と資質を養う。」とあるが、教室内には日本国民以外の生徒がいる。現場の教員は自分の生徒の成長を支えることを最も大切にしたいと考えるので、日本人以外の生徒を排除することはできない・・・とすると指導要領の目標を見直すべきなのだろう。

②「国際交流・留学と市民育成」　　担当：南部 広孝 教授

＜参加者の声＞

・南部先生のお話がとても面白かったです。グローバル化には二つの側面があるというとらえ方は私の担当する国語科の指導要領において以前より古典が大事にされるようになった感触と通じるものがあると感じました。
・私自身、学校現場での「グローバル教育＝英語・留学（国際交流）」という認識に強い違和感を抱いていました。私の勤める学校でもグローバル教育の強化で英語や留学に重点をおいていますが、日本国内の状況など全く視野の中に入っておらず、子どもたちに真のグローバル化とは何か伝えられずにいると感じています。このシンポジウムに参加することで、ずっと抱いていた違和感は間違っていることではないのだと安心したと同時に、学校現場で行うべきグローバル教育を真剣に考えていかなければならないと感じました。

③「世界市民・地球市民・宇宙市民」　　担当：矢野 智司 教授

＜参加者の声＞

・グローバルとは何か？SGH に指定されている本校でもしばしば話題になるものです。人によってとらえ方が違っていたり、グローバル即ち英語のような風潮もあります。本シンポジウムで少し落としどころが見えてきた気がします。特に、矢野先生の普遍（グローバル）⇔ナショナリズムの一方で、どちらも同一化であるという話はおもしろかったです
・矢野先生のお話に感動しました。「知」に触れる感覚に心がビリビリしました。「われわれ」とわれわれ以外という考え方、グローバル社会も国民国家も「どちらも純粋化に向かっている」という議論・・・それが前の山ノ内先生と南部先生のお話をつつみこんだ感覚に知的興奮を得ました。
・矢野先生の話がよかった。特に（特別な教科）道徳に関する見方・考え方「閉ざされた道徳」「開かれた道徳」の関係に興味をもちました。
・テーマは同じでも切り口が違い、とても興味深くおもしろかったです。矢野先生のお話、日頃興味はあったものの、難解な本を読む力も時間もなく、あきらめていたことをあれほどわかりやすく、またなるほどと思うお話にしていただいた点、知的好奇心が呼び覚まされました。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2017

――質疑応答の様子――

・スーパー・グローバル・ハイスクールとして、模擬国連の活動を授業に取り入れています。その担当として、このシンポジウムに期待し、参加しました。とても根源的な部分についてのお話でしたが、私には非常に説得力のあるものでした。また元気になることのできるお話でもありました。
・グローバル人材とグローバルシティズンの違いを認識したうえで、国際理解の教育プログラムをつくる必要があると思いました。グローバリゼーションの進行がナショナリズムの強化をひきおこすという説明に納得しました。
・各先生方が質疑の際に投げかけられていた問い・課題が印象に残りました。山ノ内先生:「エリート主義」や「外国語活動」、「日本人」のみ対象の政策への矛盾、社会は日本人だけ構成されているわけではない。南部先生:共通文化をもたねば「一流」になれない現実への違和感。矢野先生の方向性を間違わないことが大切という熱い思いも・・・。希望をもって希望を持たせる教育をしていきたいと切に思います。
・これまでに考えたことのないテーマでしたが、3 名の先生の講演を聞いて、自分が様々なことに気づいていなかったことがわかりました。「日本人」とか「われわれ」とかいう言葉を 1 つとっても他者を排除する可能性を持っていること、統一化と個別化の二重の動きの中で常に自らを問い続ける学習者を育成する必要性を再認識しました。
・三人の先生の話、司会者の先生のまとめ等、新たな視点をもらった気がします。現状を確認することやグローバル化、日本人育成など内と外にかかわることについて学ぶことができました。
・タイムリーなテーマ設定で、各先生方の示唆に富んだお話に考えるヒントを多くいただきました。お一人お一人の先生の持ち時間がもう少し長くてもよかったのかなと思われるくらい濃密な内容だったと思います。
・山名先生のコーディネートはすばらしいと思います。大変勉強になりました。まとめ方、たばね方、質問の視点などおみごとでした。お三人のパネラーの皆様も満足感があったのでは？聞き手としてもたくさんの知識をえられて良い時間でした。

＜2 日目＞　8 月 20 日（土）

●オープニング＆自己紹介タイム

西岡加名恵教授の司会のもと、オープニング＆自己紹介タイムが始まりました。新たな参加者を交え、前日同様に自己紹介を行いました。

●講演「データから読むゼロ年代――縮小する日本らしさ」　担当：岩井 八郎 教授

いわゆる「ゼロ年代」（2000 年代）の特徴を解説した後、これまで実施してきたライフコースの社会学研究の成果を紹介しながら、ゼロ年代を読み直し、日本社会の行方を検討しました。

＜参加者の声＞

・男女の職業に関するデータや家族にかかわるデータから、日本における「家族主義」の人生パターンが変化してきていることが分かった。今後、家族の在り方が複雑になり、多様化していく中で、どのような人生パターンが構築され、社会を形成していくかということに興味がある。また、ゼロ年代がきわめて不安定な時代でありながら、それが若者の意識として（データとして）は出ていないことを初めて知った。そのことが教育とどのようにつながるのか、これを機に考えてみようと思った。
・「家族」という大変興味深いテーマでした。私自身、結婚して仕事を続けていますが、30 才になり、ライフコースの選択に迷うことも増えました。生徒に進路指導をする際に、ライフプランを描かせること、思い描いたプラン通りにならなくても修正していく力をつけていくことなど高校でも意識させることが大切だと思いました。（家庭に任せきりにせずに）
・県唯一の総合学科（キャリアデザイン科）に勤務していることもあり“ライフコースの研究”が本校でも活用できないかと興味深く拝聴しました。持ち帰りたいと思います。
・統計を用いて日本の行方を見るということはとても刺激的でした。多品種少量生産、分節化の進行というなかで、統計に示されたタイプの日本人は存在しないけれども、個性化された日本人が多くいるのだと思いました。異なる世代が重なるということは、職員室でも「昔はね」という「昔」がみんなちがうということを実感しています。
・分節化、なんとなく感じていたことがリアルにデータで示され、大変納得しました。自分自身の生まれた年の特徴など必死にデータを見ました。「上からの浸透がむずかしい」。この社会学的見方は久々に触れた気がしますが、実のある改善をするためにも社会学の知見は大切だと改めて思いました。
・質疑応答時の「トレンドは現場に浸透しないものだ」との岩井先生のお言葉に大きくうなずきました。
・具体的に詳細データを重ね方で時の風向きを読む材とする考え方は授業でも活用できると感じました
・社会学の観点は教育の現場にも必要である。少し離れたところから時代や社会に自分を位置づけ、直面する課題にどう取り組むか、そこから始まると感じた。

「全国スクールリーダー育成研修」
実施の様子© 京都大学大学院教育学研究科，2017

●シンポジウム＆教科等別分科会：「E.FORUM スタンダードの再検討に向けて」

担当：西岡 加名恵（教育学研究科、趣旨説明）、
八田 幸恵（大阪教育大学、国語科）、
鋒山 泰弘（追手門学院大学、社会科）、
次橋 秀樹（教育学研究科院生、社会科）
石井 英真（教育学研究科、算数・数学科）、
大貫　守（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、理科）、
中西 修一朗（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、生活科／図工科）
小山 英恵（鳴門教育大学、音楽科／美術科）、
徳島 祐彌（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、保健体育科）、
北原 琢也（教育学研究科、技術・家庭科/教員研修ほか）、
赤沢 真世（大阪成蹊大学、英語科）
福嶋 祐貴（教育学研究科院生・日本学術振興会特別研究員、英語科）

はじめに、西岡教授より趣旨説明があり、その後、教科ごとのグループに分かれ、2014 年に作成した「E.FORUM スタンダード（第 1 次案）」の改訂に向けて議論を深めました。

＜参加者の声＞

・国語科のスタンダードの提案がとても深く進んだと思いました。読むこと、書くこと、話すことのリアリティーが強まっていくとよいなと思いました。そのうえで、「持続可能な問題追及」という視点が入ったことはとてもよいと思います。
・教科のスタンダードについて仲間の先生と話し合いながら「思考の真正性」「持続的な探究態度」等よい言葉とも出会うことができました。感謝です。
・「リアルに『未来社会』の課題を考えるパフォーマンス課題の指導」では、教科としての責任、倫理を問われた。

生徒やその家族にとって困難が予想される地域の将来を教材として扱う時の教師の責任や覚悟が問われた。どんな教材であれ、それに直接かかわる人にとっては生活・命にかかわることであることを考えた。
・パフォーマンス課題の作成にあたって、どのようなことに注意していくべきか、何が障害となっているかということについて、深く考える機会になったように思う。やはり、パフォーマンス課題が示すべき「リアル」さの中身を検討していく必要があると考える。誰にとっての「リアル」なのか、何のための「リアル」なのかを考えるべきだと思う。
・1 日目に講義、2 日目に実技演習で具体的な例をもとに考えることで、疑問がいくつも出てきました。グループで話し合う中で理解が深まりました。前半の石井先生の講義で算数・数学に関するパフォーマンス評価がより理解でき、大変ありがたかったです。
・中・高一貫校の先生方が多く、中学⇔高校という視点で課題を考えられたことがとても新鮮でした。とってもユニークな課題にたどりつきました。同じ教科の先生方とお話できたのはとても刺激的であっという間に時間が過ぎました。
・図工専科として東京都の公立小学校に勤務しているため、今回図工を立ち上げていただき有難かったです。パフォーマンス課題にチャレンジしたいと思いました。
・Q 先生の小 1 のバスケットボールの実践に感動しました。できる力を見極めることが指導では大事！その通りだと思いました。R 先生のポートフォリオの実践例はすばらしいです。生徒の学力の向上がひと目でわかります。きっと発問の質が高いのだと思います。
・他の先生たちと考えなどを共有することができて充実でした。スタンダードをどう考えていくかによっていかに授業に結びついているのか、どんな生徒を育てていきたいのか、または私たち教師は何をそしてどのように考えて授業に取り組んでいくのかたくさん考えることができました。

●クロージング

教科のグループごとに総括をしました。最後に研修評価アンケートにご記入いただき、(2 日間とも参加された方には)記念に修了証書をお渡しして終了となりました。

皆様、大変お疲れ様でした！

＜研修への要望＞

・シンポジウムで教科教育を専門とされる方の話を聞いてみたいです。各教科の立場からコンピテンシーについて語るというような感じで…小学校で研修主任をしているのもあって、それぞれの教科の立場から語ってもらい、どういうところに教科を横断した類似点のようなものがあって、どういうところにその教科の独自性があるのか、全体を俯瞰しながら考えてみたいと思うからです。
・パフォーマンス評価の根底にある真正の評価論について独立して分科会があれば参加したいと思いました。
・パフォーマンス課題をもとにしたルーブリックのつくり方や実践をもとにした講習、研修があれば他教員にもすすめられるし、私も学びが深まると考えています。
・ポートフォリオについて詳しく知りたいと思いました。特に次年度の一年生から実際に行いたいのですが、全員に対してどうすればよいのかが全くわかりません。是非、機会があれば教えていただきたいと思います。
・具体的なパフォーマンス課題の作成プロセスを紹介してほしい(実践校)。理論的作成プロセス、個人単位での方法は理解できたが、学校、教員集団としてどのように作成していくかの例示があると、各学校でパフォーマンス課題やそれに伴うルーブリックの作成が進んでいくのではないかと思う。
・カリキュラム・マネジメントの実践事例が知りたいです。
・探究活動についての内容も増して頂けると嬉しいです。
・今はパフォーマンス課題やルーブリック、AL などのキーワードに反応している先生方が多くいます。しかし、本当に大切なのは長期的な授業計画と、育てたい生徒像の明確化、および、フィードバック可能な評価方法なのではないかと考えています。そのあたりの内容を入れていくと良いかもしれません。
・今後のキーワードのひとつに「深い学び」というものがあるように感じています。それは AI の急速な発達の立役者として「ディープラーニング」があることと無関係ではないように思われます。構成要素法を超えて到った「ディープラーニング」に関してのお話が聞けたらと思います。
・特別支援の必要な子や不登校児を学級でどのように配慮したり、接したりすればよいか。
・2020 年の入試改革について。
・大学入学改革に向けて、中・高教育のあり方の検討(大学・社会が求める学力とは)。
・倫理・哲学と教科のつながり。
・発問・板書など授業の基本を学べる講座。
・新しく担任になる教師用のトラブルシューティング方法、もしくはそれを考えさせるような講義。